

此の地は笛ヶ町の末にて、野田寺町の後地なり。舊傳に云ふ。昔は金澤地邊にて茶を製する事甚だ稀なり。茶畠は此の地と野田村との兩地のみなり。故に茶畠とて地名に呼べりとぞ。さて後には茶畠を廢し邸地となし、茶畠を町名に呼びたるなり。

### ○茶畠事略

加賀國の諸郡郷里に茗茶を培養する事、舊藩國初の頃は更なり。後々もいと稀なりけん。當國にての煎茶を製造するは、小松茶とてその製甚だ鹿なりといへども、之を最とせり。この小松茶は能美郡今江の邊に作られたり。寶曆十四年郡方舊蹟產品等調書に、能美郡今江村・猿馬場村・矢崎村・符津村邊、茶木植申様に微妙公被仰付。夫より御郡之内所々畑地に茶出來仕。と載せたり。されば小松邊の茶畠も、利常卿小松に在城し給ふ頃茶木を殖ゑしめられ、それよりして諸郡郷里にも茶木を培養する事と成りたりしとぞ。微妙公は、山本基庸の夜話錄に、鷹野に御出の時分、御乗馬の足音にて、此所は上田此所は下田也と被仰故、相尋候へば無相違のよし、宮井彦九郎叫仕。と見ゆ、また江戸より

### ○山中一夢庵跡

加藤惟寅の蘭山私記に云ふ。泉野寺町に先年山中一夢と呼べる風雅の隱遁者住み居たり。手軽き小庵を結び、茶器をば一通り取揃へ、遊客に茶を振舞ひけり。其の人となり、清直にして氣性高く、庵室の景氣もよかりしゆゑにや、遊客の人々打錢をなし遊び所とはなしだり。一夢彼の小座敷の脇に瓢箪を釣りて、狂歌をば書付け置きたりけり。

ひやうたんのたんとならずばちとなりと

錢もてござれ御茶まうさう

或人添書して、

ひやうたんのたんより軽き身を持ちて

錢ほしがるはいちむさいこと

右は何れの頃ならんか、年曆時代も記載せざれば、考ふべきよしなし。何れ享保・元祿(一〇)以往の人なりしと聞ゆ。むかしはかかる雅人の隠士も居たるなるべし。さて右一夢の庵室ありしは、何れの地ならんか。今その遺跡詳かならずといへども、若しくは茶畠の地ならんか。故に爰に記載す。

### ○櫻木

茶畠の末、野田寺町の裏地をば櫻木と呼び、今櫻木一ノ小路

御歸國の時、越中白石村の内御通行の頃、百姓居屋敷の邊にほうき木を畠に植置けるを御覽被成、殊の外御機嫌悪敷、郡奉行・改作奉行共合点せぬゆゑとて、御わめき被成たるよし、山本潮兵衛語り申。とあり。右等の事共にて考ふれば、小松邊の畠地に茶木を植ゑしめられしも、微妙公の土地を見立て給うての事ならんか。改作所舊記に載せる寛文十一年四月郡方への達書に、下畠にて耕作不出来之處は、桑・茶ゑん・かうす其の外木苗を植ゑ、たそくに成候様に可仕。とありて、石川郡野田村、さては此なる茶畠の地などに茶木を植ゑ始めたるも、若しくは右寛文十一年の布達よりの事にてもあらんか。是もそのかみ利常卿小松に在城し給ふ頃、小松邊の近邑今江村等へ植ゑしめられしゆゑ、追々諸郡郷里へおよぼし給ひたるものなりしと聞ゆ。然るに、明治廢藩置縣後は、茶木或は桑楮など邸地はさらゝるものを植うるやうに成りたりしかど、上田にかかるものを植うるは、彼の越中白石村の屋腰なるほうき木にひとしといふべし。

### ○櫻木神社

より櫻木十ノ小路まであり。此の地邊は都て泉野新村の村地にて、昔は此の地より向うなる犀川河岸へかけ、都て櫻畠とて櫻木をば植ゑありしゆゑ、櫻木と稱したるものにて、元は櫻畠と一緒の地なり。或は云ふ。櫻木と呼べるは古名に非す。其の名櫻木の八幡より起れり。舊藩中は此の地の組地をば櫻畠山方組と稱し、今いふ櫻畠の地なる組地をば櫻畠河方組と稱せりとぞ。

### ○櫻木神社

櫻木の八幡とも呼べり。此の神社は泉野新村に鎮座にて、六動林の町地等四百七十餘戸の產土神なり。龜尾記に、櫻木の八幡は、泉野新村なる櫻の四郎と字せる者の邸地に鎮座ありし故に、櫻木の八幡と云ふならんと。但し附會の妄誕なるべし。又同記に、櫻木八幡社の縁起は小立野岩倉寺にありといへり。實說ならんか。或は云ふ。此の神社は甚だ舊社にて、昔は別當の寺院もありしかど、亂世の頃絶えたりといひ傳へたり。今泉野新村に此の八幡と神明との両神社ありて、神明社をば邑人方丈の宮と呼べり。いにしへ別當の寺院ありし頃、神明社は方丈の鎮守なりしゆゑ、方